

## 原田明夫元検事総長を偲ぶ 「本物の強さ」～「欣然たる面貌、快然たる微笑をもて」～

順天堂大学名誉教授  
新渡戸稲造記念センター長  
樋野興夫

検事総長退任後に、新渡戸稲造が初代学長であった東京女子大学理事長に就任された原田明夫氏（1939年11月3日～2017年4月6日）が逝去され、今年5回忌を迎える。

手元に原田氏の顔写真の掲載されている2012年の講演会のチラシがある。演題は「新渡戸稲造、その信仰生活と国際平和」である。



思えば、原田氏の全面的な協力を得て、2000年に『新渡戸稲造 武士道100周年記念シンポ』、02年『新渡戸稲造生誕140年』、03年『新渡戸稲造没後70年』、さらに04年には、国連大学で『新渡戸稲造5000円札さようならシンポ』を開催してきた。

03年は、新渡戸の母校札幌農学校のある札幌でシンポジウム「なぜ、今、新渡戸稲造なのか？～遠い過去を知らずして、遠い未来は語れなし～」を開き、原田氏は「新渡戸稲造に学ぶ・和解と共生への条件」、私は「新渡戸稲造との出会い」を講演した。

出会いは、1999(平成11)年に遡る。私の新渡戸稲造について書いた文章(記事)を読まれた原田氏から電話があり、原田ご夫妻、私と妻の4人で学生会館で会食した。

原田氏は盛岡地検の検事正時代に、地元南部藩出身の新渡戸稲造著『武士道』に魅かれ、研究論文を書き上げていた。新渡戸をはじめ全員がキリスト者で、話が弾んだ。それが翌2000年、東京・青山の国連大学での「武士道100周年」記念シンポに繋がった。

同時に一番の思い出は、月1回6:30pm～六本木の原田氏の自宅で、朋子夫人の手料理のカレーをいただきながら「21世紀の知的協力委員会」を開催したことである。

新渡戸が国際連盟事務次長だった1922(大正11)年に「国際知的協力委員会」(現ユネ

スコ)を設置したことになったもので、当時のメンバーはフランスの哲学者ベルグソン(議長)、アインシュタインやキュリー夫人ら12人で構成された。

それから100年。原田氏の論文「対決と和解への条件 ～新渡戸稲造博士に学ぶ～」では、「和解への条件」として、以下の4項目に新渡戸の考え・行動を集約している。

- (1) 賢明な寛容さ (the wise patience)
- (2) 行動より大切な静思 (contemplation beyond action)
- (3) 紛争や勝利より大切な理念 (vision beyond conflict and success)
- (4) 実例と実行 (example and own action)

詳細は『未来へのかけ橋～今も生きている新渡戸稲造の精神～』(財団法人新渡戸基金1999年刊)の巻頭論文に譲るが、新渡戸次長は、「平和のための砦の前哨基地」(国際連盟)で、東西文化の融和を図るところに世界の平和、人類の幸福があると訴え、その実現のために奔走したのだ。

「願わくはわれ太平洋の橋とならん」である。

1927(昭和2)年1月、6年半のジュネーブ生活をあとにする時は、40数か国、600人の事務局員から「送別の辞」が贈られた、と原田論文にある。

原田氏は、検事総長退官後は、生誕150周年記念『武士道と修養』(実業之日本社2012年刊)に発刊の言葉を寄せ、ラジオ深夜便では「裁くこと、赦すこと～新渡戸稲造、東洋の心と西洋の精神と」を説き、東京女子大学の学生には「多様性と共生への視点～世界で・社会で・家庭で～」と話すなど、新渡戸の考えを現代に反映させたい1点だったような気がする。

「争いのない社会を築くために何を拠りどころに考え、行動すればよいのか」

「国際社会で尊敬を集め、活躍するには日本人はどうすればよいか」

混迷する世界、低迷する日本の国際的地位向上に、新渡戸イズムを！というわけだ。

私は、「日本国のあるべき姿」として『日本肝臓論』を展開している。日本国＝肝臓という「再生」論に、行き詰まりの日本を打開する具体的なイメージが獲得されよう。

人間の身体と臓器、組織、細胞の役割分担とお互いの非連続性の中の連続性、そして、傷害時における全体的な「いたわり」の理解は、世界、国家、民族、人間の在り方への深い洞察へと誘うのではないだろうか。

新渡戸は「チャフル」(Cheerful)を力説したと、矢内原忠雄著『余の尊敬する人物』(岩波新書)にある。《チアフルな顔付を以て人に接し、見ず知らずの人に対しても、少しの親切でもしてあげるといふ心もちで暮らせば、社会はどれだけ温かくなるかも知れない》《それが日本人に対する外国人の誤解を除き、日本の国際的地位を高むる途である、というのが(新渡戸)先生の考えであります》



原田氏は、ロッキード事件が起きた時、ワシントンにある日本大使館の一等書記官だった。米司法省を通じてロッキード社が日本で航空機を売り込んだ実態の上院委員会での議事録を入手。さらにはロ社幹部の囑託尋問実施のために司法省との難しい交渉にあたった。

「ボストン美術館へ2人で交代で運転して行ったこともあったのよ」と朋子夫人から聞いたことがあった。

2人は、合唱を通じて知り合ったと聞いた。東大法学部と東京女子大（東女）の学生。原田さんが東女の理事長を務め、今、私が理事を務める。深い因縁を感じる。

私は、『尺取虫運動 = 自分の original point を固めてから、後ろの吸盤を前に動かし、そこで固定して前部の足に前に進める。かくていつも自分の originality を失わないですむ』。それに「どんな境遇、状況でも 確実に 前進できる人物になれ」を教わったものである。

「人間社会」のあり方を学んだ。まさに『人間社会の病理 ~ 尺取虫運動に学ぶ ~』である。

それが、『われ21世紀の新渡戸とならん』（日本語版 & 英語版）の出版に繋がった。原田明夫 氏との「人生の邂逅」は、私の貴重な宝である！



原田氏の一番の魅力は、いつも笑顔を絶やさない人柄のよさであった。

それは、「他人へのおもいやり」であり、「他人の感情を尊敬することから生ずる謙遜・慇懃の心」を常に忘れない、「濃やかな配慮の人」であったことであろう。

「欣然たる面貌、快然たる微笑をもて」（新渡戸稲造）の実践である。

「チャフル」を常に意識されていたのかも知れない。

\*ひの おきお=1954（昭和29）年島根県生まれ。医学博士。順天堂大学名誉教授。2004年「がん哲学」で第1回新渡戸・南原賞を受賞。がん患者の訴えを聞く「がん哲学外来」を全国で展開。人気のお医者さんである。